芹沢長介コレクション展示室

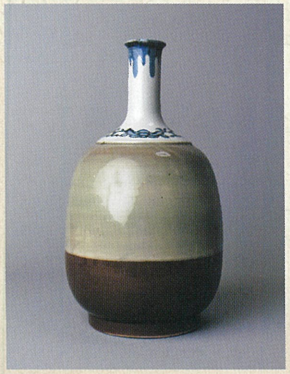
芹沢長介氏（東北大学名誉教授、東北福祉大学名誉教授、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館前館長 1919-2006）は、日本に旧石器時代が存在したことを証明し、我が国の先史時代研究に貢献された考古学者です。

また、氏の父芹沢銈介（1895-1984）は、柳宗悦による民藝運動の一翼を担った人物で、「型絵染」の人間国宝です。同時に世界古今の美術工芸品の蒐集家でもあり、その膨大で秀逸なコレクションは、「もうひとつの創造」と呼ばれています。

芹沢長介氏と加美町のかかわりは昭和62年（当時中新田町）、氏より約1000点におよぶ東北近世陶磁の寄贈を受け、「東北陶磁文化館」（平成19年芹沢長介記念東北陶磁文化館に改名）が開館したことに始まります。館は、東北の近世陶磁を一堂に収蔵公開する美術館として、高い評価を受けておりましたが、施設の老朽化等に伴い令和3年に閉館となりました。収蔵品の多くは、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に移譲されましたが、本町の伝統磁器である切込焼については町に残ることとなりました。

「芹沢長介コレクション」は氏の専門である考古学による見識と、父とともに培われた美術工芸の審美眼によって収集された、239点からなる貴重な作品・資料群から成るもので、令和5年、加美町有形文化財に指定されました。

三彩桔梗皿



鉄釉掛分染付花文徳利

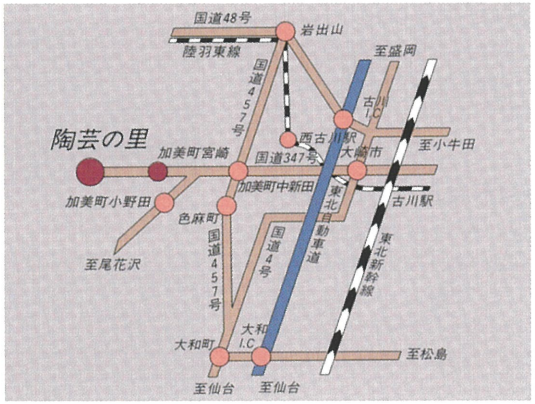
染付牡丹雲文植木鉢

陶芸の里の施設

陶芸の里 ゆーらんど

地域活性化の拠点として平成2年4月オープン。切込古窯を背景に展示施設切込焼記念館、レストランすみかわ、郷土文化保存伝習館（陶芸教室）が並ぶ。更に平成6年、コテージを備えた温泉保養施設ゆーらんどが開業し、陶芸の里にくつろぎの空間が加わる。

伝習館では、自分だけのオリジナル作品が作れる教室をしている。手作コース1,500円、絵付コース1,500円～、毎日10時30分と13時30分の2回行われる。（要問合せ）



交通のご案内

〈JR東日本利用の場合〉

- 東北新幹線仙台駅より一車で80分
- 東北新幹線古川駅より一車で40分

〈東北自動車道利用〉

- 東京方面から一東北自動車道大和I.Cより40分
- 盛岡方面から一東北自動車道古川I.Cより40分

観覧のご案内

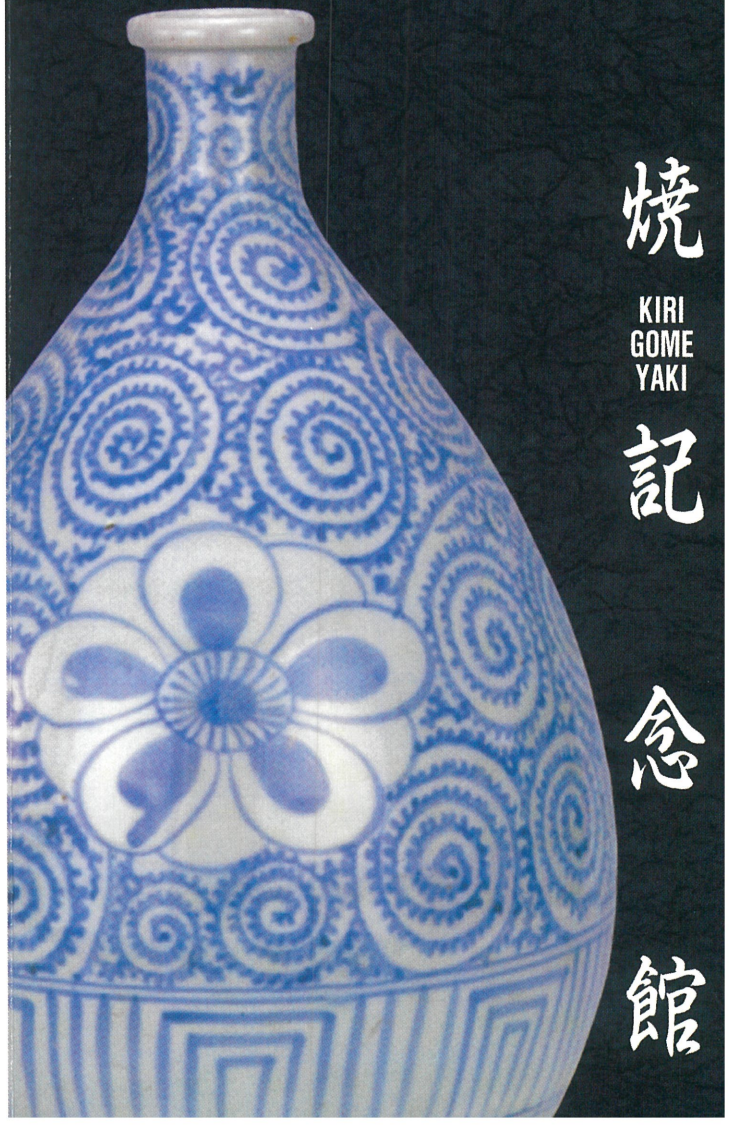
- 開館時間　AM10:00~PM4:30　最終入館PM4:00
- 観覧料　大人300円（250円）　小中学生150円（100円）
  高齢者・学生200円（150円）
  （　）内は20名以上の団体
- 休館日　毎月第2・4月曜日・年末年始
  展示替で休館する場合もあります。

お問い合わせ
切込焼記念館（加美町ふるさと陶芸館）
〒981-4401 宮城県加美郡加美町宮崎字切込3　☎0229-69-5751/6366

切込焼記念館

KIRI GOME YAKI

切込焼が彩る謎と美の世界。



切込焼とは…

江戸時代後期から明治時代初めにかけて、加美町宮崎切込地区で生産された陶磁器。仙台藩の御用窯として上質の磁器を焼く一方、庶民向けの日用雑器も大量に生産していました。なかでもその大半を占める染付磁器は、温かみのある素朴な魅力で、多くの人々をひき付けてきました。しかし、その歴史はまだ謎に包まれたまま…。今後の調査研究に期待されています。

切込焼の歴史

◎開窯の時期

開窯を伝える資料がないために、切込焼の最大の謎として、伊達政宗創始説などの様々な説が発表されてきました。現在、文献で確認できる最古が天保 5 年、伝世品の最古は天保 6 年の銘をもつ湯呑茶碗ですが、まだ明確な答は出ていません。

◎最盛期

少なくとも天保後期には活発に窯が稼働していたことが文献から分かります。弘化・嘉永期には藩の援助の下、商人恵比寿屋徳蔵による出資と販売、切込瀬戸山棟梁・山下吉蔵の活躍で切込窯が最盛期を迎えます。

◎衰退期そして廃窯

安政に入った頃から、窯の運営は悪化します。恵比寿屋徳蔵や山下吉蔵の死去に加えて、藩窯が仙台へ移されるなど、厳しい状況に迫られました。そして明治維新・廃藩。明治の初め頃に、切込窯の煙は絶たれました。

◎大正窯

大正9年、町の事業家岩渕丈之助・沼田秀平らにより、再興切込焼が誕生しました。製品には「切込」「岩渕製」などの銘があり、当初は海外輸出を意識した壮大な構想がありましたが、世界恐慌のあおりを受け、わずか数年で廃窯となっています。

染付鷺文見込丸鉢　加美町・S63出土
1830～1840年代　切込第Ⅰ期

加美町指定文化財　染付牡丹唐草文花生
一対のうち　嘉永2年銘（洞雲寺蔵）

染付松文すず徳利　加美町・S63出土
1860～1870年代　切込第Ⅲ期

切込大正焼　白磁恵比寿像・白磁大黒天像
1920年代

切込焼の陶工

◆山下 吉蔵（寛政11年～元治元年）

丹後国熊野郡久美浜村（現京丹後市）生まれ。肥前有田で修業後、秋田の寺内窯を経て、ここ切込に入ったのが天保後期頃と伝えられています。

彼の活躍した頃は、仙台藩の援助と恵比寿屋徳蔵というスポンサーを得て、切込窯が最盛期を迎えています。伝世品に記された銘によると、少なくとも嘉永2年には「切込瀬戸山棟梁」としてその腕を振るっていたようです。

◆長谷川 和吉（文化13年~没年不詳）

切込窯に来る以前は、秋田の寺内窯で、涌井弥兵衛（新庄東山焼を創業）の弟子のひとりとして修業していたようです。

明治初年頃までは活動のあとがみられますが、その後の消息については全く不明です。

◆山下 十七蔵（文政3年~明治11年）

明治2年に切込窯で作陶していたことを示す資料が、発掘調査で出土しています。その後、切込を離れ、明治6年、現在の岩手県花巻市台温泉付近に、小瀬川焼（湯ノ沢焼）を創業しました。当地の伝承によれば、彼は若いころに唐津で修業し、仙台藩のお抱え瀬戸物師として活躍した腕利きの陶工だったようです。

更に陶工としては大衡良次、鈴木音次郎の存在が確認でき、また、秋田の寺内から岩間敬太夫・佐織の兄弟が山下吉蔵に同行して切込に入り、職工頭として働いたと伝えられています。

染付宝珠竜文丸皿　山下吉蔵銘
加美町・S63出土　1850年代　切込第Ⅱ期

加美町指定文化財　染付牡丹唐草文花生
（洞雲寺蔵）　願主銘部分

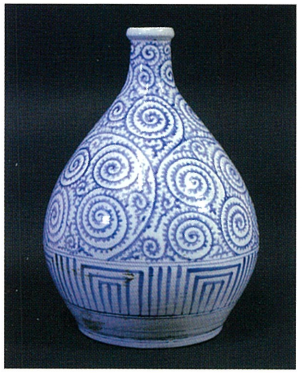
白磁おろし器　長谷川銘
加美町・S63出土

陶製道祖神部分 明治二歳山下十七蔵
銘　加美町・S63出土

切込焼・伝世の美

白地に藍色で文様が描かれる染付磁器が、切込焼の主流です。

献上用の上質なものより、むしろ素朴な日用雑器が切込らしさを伝えています。なかでもらっきょう形の徳利は、どっしりした重量感が魅力で、切込焼のシンボルとして知られています。染付の外には瑠璃釉や鉄釉があり、さらにトルコ青・紫・白で彩られる二彩・三彩は、「東北陶磁の華」として珍重されています。



染付蛸唐草文らっきょう形徳利
郷右近コレクション

三彩小皿

白磁唐獅子文水滴　猪股コレクション

鉄釉小形甕・豆甕

染付梅に蛸唐草文長皿

瑠璃釉燗徳利